学会報告

第25回日本災害医学会総会・学術集会

浅井　康文[1)]、目黒　順一[2)]

[1)]雄心会函館新都市病院、[2)]北海道医師会常任理事

はじめに

日本集団災害医学会は名称を日本災害医学会と変更し、会員数も5,000名を超えた。今年で25回目を迎え、兵庫県災害医療センター長の中山伸一会長の下で、2020年２月20日（木）～22日（土）にポートアイランドの神戸国際会議場を中心に開催された。メインテーマは『これでいいのか、災害医療！』で、会長講演、特別講演、招待講演、教育講演、阪神・淡路大震災25年特別企画、シンポジウム、パネルディスカッション、一般口演、ポスター発表等、多岐にわたっていた。新型コロナウイルス（COVID-19）の影響で一部プログラムや座長の変更などを行わざるを得ない状況にもかかわらず、約2,400名が参加した。

学術集会

開会式後、中山伸一会長の会長講演があり、1995年１月17日に発生した阪神・淡路大震災後の災害医療の発展が講演された。まずこの学会の設立の経過が述べられた。1993年７月12日に230名の犠牲者を出した北海道南西沖地震（奥尻島地震）後に、災害医学関係者が奥尻島を現地調査し、その時に奥尻の川尻旅館で夜を徹して災害専門の学会設立の話が進められた。そして1995年の阪神・淡路大震災後の1996年に大阪で第１回日本集団災害医療研究会（太田宗夫会長：大阪府立千里救命救急センター名誉所長）が開催され、25年目の節目に神戸で２度目の学会（第14回会長：神戸大学・石井　昇教授）が開催された。特別講演では、医療法人雄心会・法人本部の青野　允病院局長(第４回会長:金沢医科大学)が、日本列島は地球表面の0.25％にしか及ばないが、環太平洋地震帯が有するエネルギーの約９％を有し、周囲を海に囲まれ、常に荒波に洗われている世界有数の災害・飢餓列島であることや、災害対策の究極の目的は人命救助で、「もし人間がより賢明により有用になり得る道があるとすれば、その手段を医学にこそ求めるものである」といったデカルトの信頼に応えることが日本災害医学会の存在意義であると述べた。また1979年のカンボジア難民救助で、助かる人を選別するトリアージの概念を学んだことや、視察団長であった緒方貞子氏の業績などを、自身の経験や教訓を元に若い世代に熱く講演された（**写真**）。

特別講演での青野允先生（左）と中山伸一会長（右）

阪神淡路大震災後、1996年の災害拠点病院、そしてEMISによる災害情報、ドクターヘリ導入、DMAT設立、広域搬送など、災害医学の進歩はめざましいものがあったが、ここで一度過去を振り返ってのテーマが『これでいいのか、災害医療！』であった。これでいいのかでは、DMAT、JMAT、DPAT、災害情報の活用、原子力災害医療、遺体・遺族対応、MCI対応、イベント医療、CBRNE対応、ロジステック、DHEAT、保健医療活動チーム、BCP、災害拠点病院、避難所、教育・研修、訓練・演習、要配慮者対策など、他職種の会員による活発な討論がなされた。

DMAT関連では、DMATの創始者である国立病院機構災害医療センターの辺見　弘名誉院長による、Preventable Death（防ぎ得た死）、インパクトのあった新潟県中越地震（瓦礫の下の医療、車中泊による脱水や静脈鬱滞による深部静脈血栓症）、東日本大震災広域医療搬送（岩手県の花巻空港のSCUから16例中、新千歳空港へ４例の搬送）、災害医療コーディネーターの重要性、透析患者の医療連携や県外搬送、さらに今後の問題点として日本赤十字DMATとの相互評価などが報告された。

２日目の阪神･淡路大震災25年特別企画､「あの時、あの場所で：知られざるエピソード」では、6,308人死亡、30万人避難、19万棟の家屋倒壊の現場で、一部が倒壊した神戸市立医療センター西市民病院、芦屋市医師会、神戸大学、大阪赤十字病院等が、挙院一致で対応に当たったこと、挫滅症候群の患者に対しての大阪へのヘリコプター搬送のピークは５日目であったことなどが述べられた。一方では25年の経過で、犠牲者を悼んで毎年12月に神戸市で行われる神戸ルミナリエの式典は縮小の方向にある。

現在世界の災害は、８割が洪水などの水関連、そして４割がアジアで生じている。予想される南海トラフ地震に、今後どう準備（Prevention ＆ Prepardness）を進めていくべきかや、また宇宙のゴミは25万個と将来の宇宙での災害の講演もあった。

教育講演の「温故知新」では、長崎県島原病院の徳永能治病院長が「雲仙普賢岳大火砕流災害での医療対応を振り返り」で、1991年６月３日の大規模火砕流について講演された。気道熱傷を含む広範囲熱傷による重症被災者が搬送され、救命例はわずかにとどまったが、職員一丸となって17名を受入れ、混乱の中で早期処置や転送を含めた処置を行ったことが紹介された。このことが、その後の、重症患者の分散搬送（ICU収容数には限界があり、熱傷時の災害ネットワークの確立）へとつながった。

日本では、2014年の御嶽山噴火があるが、最近では2019年12月９日のニュージーランドのホワイト島で発生したマグマを伴う火山の噴火で、重度熱傷などで17人が死亡している。また2020年１月12日にはフィリピンの首都マニラの南約70キロにあるタール火山のマグマの噴出が報告されている。北海道でも、有珠山噴火（2000年）から20年経過した。この噴火では、有珠山周辺地域の住民が噴火前に全員無事に避難できたのも、地震などから噴火を予測できたためであるが、現在でも噴火の時期を正確に予測することはできない。

そのほか、北海道胆振東部地震のBlack outで経験したように、電気が来ないと情報を伝え合えないこと、透析における大量の水道水や電気の安定した供給の問題が討議された。臨場感がある５Gを使用してのバーチャル・リアリテイの災害訓練の紹介もあった。開場前の広場には近隣の災害拠点病院からDMAT車両が展示されていた。

COVID-19関係では、CTの有用性や不顕性感染などが報告され、活性化O_2を水素が除去するため、消毒に水素は災害にも役に立つとの講演があった。また学会中、新型コロナウイルスの流行で、ダイヤモンド・プリンセス号へ、厚労省の依頼を受けて搭乗した政府職員などが感染し、病院でのバイキン扱いや家族への差別などがあり、学会中に日本災害医学会として「新型コロナウイルス感染症対応に従事する医療関係者への不当な批判に対する声明」が出された。その後のCOVID-19は、クラスター（小規模な集団感染）、オーバーシュート（爆発的患者急増）、ロックダウン（都市封鎖）また途上国のサイレント感染がキーワードになっており、世界的なパンデミックとなっている。

終わりに

学会前日の拡大評議員会を兼ねた神戸港クルージングは、COVID-19の感染拡大のため急きょ前日に中止された。本学会以降の日本循環器学会、日本集中治療医学会など、すべての日本の学会が中止され、東京オリンピック・パラリンピックの開催も翌年に延期された。次回は、来年３月15日（月）～ 17日（水）に、国際医療福祉大学の石井美恵子教授（東京都）で開催予定である。

お知らせ

第54回北海道ドクターズゴルフ大会 延期のお知らせ

令和２年７月５日（日）にアンビックス函館倶楽部にて開催を予定していた第54回北海道ドクターズゴルフ大会につきましては、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に係る感染拡大防止と参加者の健康・安全を考慮した結果、開催を延期することといたしました。

次回大会は、函館市医師会の担当で令和３年７月４日（日）に開催を予定しておりますので、ご案内申し上げます。